

小学校以降の学びを見通した幼児の学びの意欲の探求 ～観察記録・分析の工夫・改善を中心に～

元田 美智子^{*1}・松野 絵理^{*1}・修行 祐子^{*1}・梅林 道子^{*1}
高木 留美子^{*1}・近藤 真紀^{*1}・朝長 久美子^{*1}・井口 均^{*2}・小西 祐馬^{*2}

※1 附属幼稚園 ※2 教育学部

1 はじめに

本研究は、2011年度の学部教員と附属幼稚園との共同研究の成果をまとめたものである。附属幼稚園での研究会は毎週水曜日に実施し、学部教員との共同研究を今年度は4回実施した。

2005年に発表された中教審答申の中で今後の幼児教育のあり方として「幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」とある。これまでの幼稚園教育要領が幼児期の固有性や遊びの重要性を説いていたことを考えると、この答申が「学びの重要性」「発達の連続性」を強調していることがうかがえる。この「発達の連続性」という言葉を学力向上の視点から小学校や中学校との接続・一貫性をもたせるという意味でとらえてしまうと、『幼児教育は就学に向けての準備としての教育』と位置付けてしまわれる危険性があるやもしれない。本園でも幼稚園から小学校へのスムーズな移行が文字や数などの知識の獲得が大切で、大人はその獲得の機会を与えることが必要なのではないか…と心配する保護者もいる。しかし、2001年のOECD報告書には、『幼児期は人生最初のステップとして極めて重要な意義をもつ』『それ自体が重要な意味をもつ人生最大の段階である』とある。これは、生活の中で子どもは様々なことを学ぶことが大切であるという保育観の基に、子どもの生活こそが教育であり、それを大切にすることが子どもの未来につながるということなのだと思う。また、文科省が行った全国学力調査やOECDの学力テストの結果から『日本の子どもたちの知識面は満足のいくものとする反面、思考力や表現力、その活用能力においては劣っている。また、学習意欲についても低い。』ことが明らかになった。知識は様々な方法でどんどん注入できるが、得られた知識や技能を使って判断したり、表現したり、創造したりする力がなくては生きる力の育成も限られてくるのではないだろうか。そこで本研究では、幼児期における学びを『生涯にわたる学習能力の基礎を培うこと』と捉えた。学習能力の基礎とは、遊びを中心とした保育の中で、子どもたちが友達や保育者とかかわり合いながら好きな遊びに没頭し、様々なことを考え、意欲的に学んでいくものだと思うのである。そのためには幼児期に関心・意欲・自発性を高めていくことの必要性を改めて感じている。本園では「いまここにある生活が大切であることとはどういうことなのか」「子どもの生活の中でどのような意欲的な学びが見られるのか」について、

- ・保育場面における子どもの主体的活動を観察・記録する。
- ・幼児教育の主課題である子どもの関心・意欲・態度の育ちを具体的に読み取る。
- ・今後の対応の手立てを協議することを通して、その学びの意欲が今後の育ちにどうつながっていくのかを探る。

と、このサイクルで検証することにした。

そこで、今年度からの研究テーマを

「小学校以降の学びを見通した幼児の学びの意欲の探求～観察記録・分析の工夫・改善を中心に」とした。

2 保育記録（子ども観察）の試み

子どもや遊びを細かく観察記録し、分析すること…そして、教職員皆で語り合うこと…これは、どの園でも当たり前に行われていることだと思う。本園でも同じように、毎日それぞれの教職員が子どもたちの姿で印象に残ったこと等を話し合い（情報交換会）の中で話題にしている。会の中では、保育者が気付かなかった子どもの姿を伝え合い、保育の内容や環境構成等についても語り合っている。しかし、保育記録を見ると、保育者自身の保育について反省を含んだ内容であったり、限られた時間の中で子どものことを語るとき、ついつい「こんなことがあって困っている。」「この子にどう接すればよいのか。」などと自分の保育についての悩みや子どものマイナス面を話したりすることが多かった。保育者は、教育課程と目の前にいる子どもたちとを見比べながら保育にあたる毎日で、子どもへの自分の接し方が悪いのだろうか、環境構成が悪かったのだろうか等と自分の力のなさを責め、「どうしてこの子はこんなことをするのだろうか。」と子どもたちの負の面が目についていたように思う。今年度始まったばかり、本研究を始める前の、3歳児の観察記録がある。

【3歳児・I男】

入園式の時に隣の子どもの顔を笑いながらつねったり、保育室で突然、奇声を発したりするその姿が気になり観察することにする。4月18日の全体保育の際には、遊戯室へと入った途端走り回り、補助の保育者に注意されるとすぐに「もうしません。」と言う。

事例1 「いいのよ。」「見えないのよ。」 4月19日

ままごとコーナーでB子と道具の取り合いになる。力の強いB子に取られそうになり、頬と胸を叩く。仰向けに寝転がり大きな声でB子が泣き出した。その横で知らないふりをして遊ぶI男。道具を使いたいときには相手に話をすることを伝える。

I男「貸してね。」

B子「いや。」

I 男「いいよ。」

そう言って、道具を無理矢理取る。また、仰向けになってB子が泣く。友達が嫌と言ったときには貸したくないということを教える。保育者も一緒になってもう一度話をさせる。

I 男「貸して。」

B 子「いやっ。」

I 男「I 君、使うのよ。使いたいなのよ。」

B 子「いやっ。」

T 「B 子ちゃんだけの道具じゃないんだよ。みんなで使うの。」

I 男「I 君も使うのよ。」と言いながら奪おうとする。順番に使うことを教える。

B 子「B 子の後って。」

I 男「いいよ。」

降園時に支度が済んだ子どもたちに補助の保育者が本を読んでいた。I 男はうろうろしている。友達は本を読んでもらおうと補助の保育者の側に集まっていく。I 男は支度を済ませると本のコーナーに走って行き、友達に向かって飛びつく。友達を踏みつけて前へ行こうとする。皆、驚く。保育者が友達に飛びついてはいけないこと、後から来た人は後ろへ並ぶこと等を伝えた。すると

I 男「いいのよ。I 君、見えないのよ。」と言う。

保育者の振り返り

入園して間もない時期。他者とどうかわかってよいのかかわからない様子の I 男。母親の話では、I 男の周りには大人ばかりで I 男がわがままになってしまったのではないかとのことだったが、それだけではなさそうだ。

次にどうしたいのか・どうすればよいのか

注意深く観察し、周りとのかわかり方を I 男と一緒に考えていきたい。今後どのような言葉をかけてよいのか、どう接していけばよいのか悩む。

I 男は人とうまくかわかることができないのではないかと心配していた子どもだった。入園式の当日から、隣の子どもの頬をつねる、椅子から立ち上がり歩き回ろうとする等その行動は目立っていたからだ。何かあるとすぐに手が出る・友達を押す・ところかまわず友達を蹴る・近くのを投げる…担任にとって「気になる子」の一人であった。事例 1 を見てもわかる通り、保育者は I 男の負の面が気になり、毎日そのような事例ばかりが集まっていたように思う。

そんな時、本研究を共同ですすめている教育学部の井口均教授との話の中で話題になったのが、ニュージーランドのテ・ファリキを原理とする「学びの物語」であった。これは、子どもの保育中のエピソードから子どもを見取ること、本当に些細な出来事を『幼児の関心や興味』・『熱中する姿』・『直面している困難に立ち向かう姿』・『自分の考えや気持ちを表現する姿』・『他児または他者の

立場から物事を見ようとする姿』の5つの観点で捉え、幼児の育ちを取り上げていくというものであった。今まで私達が行っていた観察の記録と比較する中で、この学びの物語は子どもの姿を肯定的に記録していることに気付き、まずそこから取り組んでみることにした。今まで行っていた、子どもを観察・記録し、話し合うということは継続することとした。しかし、その記録の方法、話合いの持ち方等について改善すべき点は明らかになるものの保育者での捉え方には多少の相違が見られた。

3 大宮教授を招聘しての研究会

そこで、本研究を進めるにあたり、『学びの物語の保育実践』（ひとなる書房2010年）の著者である福島大学人間発達文化学類教授の大宮勇雄教授を2回招聘し、保育参観・保育カンファレンスを行った。子どもをどう観察記録していけばよいのか、関心・意欲・態度の育ちをどう見取っていけばよいのか等、下記の点について協議した。

○記録の取り方

保育者は生活の中で子どもの記録（事例）をとる際に、一人の子どもを記録する（ロングストーリー）方法、遊びを通して子ども（子どもたち）を記録する（ショートストーリー）方法のどちらかで記録を取っていた。本園でその方法を統一すべきか否かということが課題となっていた。しかし、大宮教授から記録に関しては完成型を求めず、遊びの中で保育者が子どもの関心・熱中していることを探し、その意味を考え、その子を十分に見つめることがそもそも大切なのであり、それに迫る方法は保育者各自でよいという助言をいただいた。保育者の記録を基に皆でそれを共有し、保育を振り返り、改善することに意味があり、さらに子どもを5つの観点で見直し、子どもを丸ごと受け止めるうちにその子に対して新しい見方をする自分に気付いていくというものであった。また、ロングストーリーでは一人の子どものよさを見つめ、ショートストーリーでは遊びの事例を積み重ねていくうちにその中で育つ子どもたちのよさや育ち合いを見つめるというねらいの二重構想によって研究を進めていくことの意義についても確認し合った。

○保育者間の話し合い（情報交換）の重要性

子どもについて皆で話をするということは、保育者個々人の目で見えた「その子」についてさまざまな角度からその子を見つめることであり、子どものよさをより多く見取ることができるという利点がある。この研究では子どもの内面をどこまで見取れるか、つまり細かな心の動きまでも見取ることのできる保育者自身の感性が求められる。その感性は保育者相互が知恵を出し合い、意見を交換することによって磨き合うことができるとのことであった。

○幼児の学びは学ぼうという意欲によって培われる

このことについて具体的例を用いて説明する。

幼児は楽しいこと、興味があることにはとても敏感です。

園行事の「秋まつり」が近づいたある日の保育のことです。子どもたちは「お店で売りたい商品作り」に気持ちが動いています。「くじ引き作り」「指輪作り」等様々です。お店屋さんに並べる商品作りに子どもたちは、励んでいます。お店屋さんの商品を作るのに、ハサミやテープを使っています。ハサミの使い方に苦労している子どもも友達のハサミの使い方を横目で見ながら学んでいます。次第に紙を丸く切るコツをつかんできました。紙の厚さに応じて力加減を考えています。

最初はお店屋さんの商品を作りたいという思いで始まった遊びを通して、実はハサミの使い方を子どもは自然に学んでいます。

当初はハサミの使い方に興味があったわけではありませんが、「お店の商品を作りたい」という具体的な遊びを通して、意欲が高まり思ってもみなかったような、学びに繋がることがあります。

このように幼児期の学びは遊びを通して生じた学ぼうという意欲が学びそのものに繋がることがある。保育者は、子どもの気持ちの動きを捉え、じっくりと子どもの遊びを見守る必要があることを再確認した。

これらを受け、改めて記録方法・話し合いの場（情報交換会）を再考した。保育者が観察の対象児、または遊びの様子を抽出し、観察・記録することを加えた。対象児については、これまで保育者がやや否定的に見がちであった

- ・「どんな子どもなのか？」と気になっている子ども
- ・自分で遊ぶことができないと思っていた子ども
- ・一見乱暴に見える子ども
- ・友達とうまくかかわることのできない子ども

とした。

次に、それぞれの保育者が気付いたときに、ほんの些細なことでも心に留めた言動を記録に取ることとした。遊びの中でどんなことを工夫していたのか、どんなことを学んでいるのかと捉えたのか等について先に述べた 5 観点を念頭に置き、保育者なりにその子の生活背景も含めながら振り返ることにした。さらに、その後はその記録を基にできるだけ皆で意見交換を行い、保育者は、どうしてその行動が気になったのか等を含め自分の思いを伝えるうちに保育者が気付かなかったことや考えもしなかった意見や、保育者が知らなかった事例（エピソード）等が他の保育者から出されることもあった。保育者が自分の思いと違う行動をする子どもを否定的に見ていたのだと思い知らされたことが幾度となくあった。出された意見から、次の手立てや、環境構成を考える際のヒントが生まれることもあった。やはりこの話し合いこそが、研究を進める上で重要なポイントとなると考え、情報交換の時間を改めて見直し、その大切さを共通理解した。

4 保育記録の試み～5つの観点で子どもを見つめて

保育者間で子どもを5つの観点で見るよう共通理解したり、話し合いの仕方を改善したりした後、次の事例2のように観察や記録の内容が少しずつ変化してきた。

事例2 「片付けしなかった。」 9月5日

片付けの時間の少し前、大好きなパターンプロックで遊んでいたI男。

H男「うめ組さん、お片づけー。」

I男「・・・。」

何も言わずにパターンプロックで遊ぶ。他の子どもたちは片付けている。作っている途中なので、保育者はI男の様子を見ていた。作っては崩し、また作りの繰り返しだった。いろいろな色や形を使い、風車のようなものを作っていた。中心に一つの形を置き、その周りに菱形や三角などいろいろな形を置いて、眺めている。周りの様子には全く気が付かないほど熱中する。

I男が側にいてじーっと見ている。何にも言わず、続けるI男。H男は、片付けだと大きな声で言い続けている。その声にも反応しないI男。しばらくして、

I男「でーきたっ。I君の好きな風車ができたよ。見て。見て。」

T「あら、素敵ねー。」

I男「そうよ。素敵でしょう。（笑顔）」

すると、周りを見回し、友達が片付けていることに気付くI男。

I男「I君、作っていたから片付けしなかったのよ。ごめんなさい。」

L男や他の子どもたちも、I男の作った風車を見て笑顔になる。

I男「お写真撮ります。カシャ、カシャ。これで大丈夫だね。」

その後、写真を撮る真似をしてから自分で片付けた。

保育者の振り返り

片付けの時間なのに周りの状況にも気が付かないほど熱中して遊ぶ姿が見られた。形や色にとってもこだわりのあるI男。「見て。見て。」と自慢気に話す様子から作品は本人の満足のいくものだったのだと思われる。周りの様子に気が付かないほど集中する姿、自分のイメージがあるのか納得するまで何度もやり直す姿を嬉しく思った。

次にどうしたいのか・どうすればよいのか

色や形に彼なりのこだわりがあるようなので、絵を描いたり、ブロック等、形に興味を示したりする様子が見られたら注意深く観察したい。以前よりも周りの様子を見ることができるようになったことを認めていきたい。

以前ならば、保育者は片付けをしないI男のことが気になり、遊びを中断させていたかもしれない。事例2のように、片付けをする周りの様子にも気が付かないほど、集中するI男の姿を最後まで見ておきたいと思ったのも本研究を始めてからのこの保育者の変化であろう。このように子どもを観察する際に、『特定の課

題をチェックし否定的に見る』のではなく、日々の様子を『子どもの長所に目を向けて観察する』方法、『子どものできないことに注目する』のではなく、『子どもの有能さに目を向けて観察する』方法で記録をとるうちに、私たち保育者の意識に次のような変化が見られるようになった。

- ・子どもの良さの視点に立つことで、子どもの姿を思わず笑って観察している自分がいた。
- ・次の保育の視点のヒントを保育者間で考える事ができるようになった。
- ・子どもをここまで育てなければ…という気負いがあって苦しいこともあったが、今では子どもの日々の小さな成長がとても嬉しく感じられる。
- ・最初は子どものよいところを見付けないといけないということで、それで本当にいいのかと悩んだこともあった。しかし、記録を取っていくうちに気になるところも含め、それがその子ども自身であると肯定的に見るようになってきた。
- ・クラスの中で気になっている子どももあまり気にならなくなってきた。以前のように心配することが少なくなった。
- ・子どもに無理強いをしなくなった。
- ・短所ばかりが目につく子どもの長所を見付けることでその子どもに対する自分の見方が変わったように思える。
- ・長所に目を向けると普段見過ごしてしまいそうな小さな変化に気付くようになった。さらにその小さな変化にも連続性がありそれが現在に至っていることにも気付き、その変化を見逃さないようにしようとし、日々の見取りの大切さを痛感した。
- ・広い目で子どもの姿を見るようになり、接し方にもゆとりが出てきた。そのため子どもたちも以前より伸び伸びと遊びを楽しむようになった気がする。
- ・子どもたちが、友達を認め合う姿が多くなった。

前述について 2011 年 10 月 28 日の本園研究協議会で発表したが、その後さらに協議方法について次のように改善した。

○協議方法の改善

各保育者が保育の中でのエピソードのみを他の保育者に伝え、様々な意見を出しができるようにした。その方が先入観なく事例に向き合うことができ、その子どもに対する様々な見方が意見として出されるようになった。皆で分析した後、出された意見を基にその子どもにどう接していくべきなのか保育者自身が考えるという流れで進めるよう改善したことによって、なお一層の活発な意見の交換がなされるようになったと思う。

5 ICT等を活用した研究協議

今年度は、協議をする場合に幼児への様々な見取りが意見として出るように、保育者複数で一人の子どもを観察する方法へと転換した。その際、デジタルカメラやビデオ、パワーポイント等の ICT も活用しながら意見交換をしている。

(1) I男の「学びの物語」

当初は保育者にとって気になる子の一人であったI男。自分の感情を言葉で表出するという点において未発達であり、その方法は、友達に噛み付く、友達を蹴る・押す・叩く、物を投げる等極めて暴力的であった。家庭の中で大人に囲まれ、同年齢の子どもと触れ合うことの比較的少ない環境の中で育ってきたI男。それが幼稚園に入園した途端、今までの環境との違いに戸惑い、自分でもどうしようもない状況だったのではないかと推察する。入園当初は事例1にあるように、友達とどうかかわればよいのか迷っているI男の様子が毎日のように記録として残されている。6月の水遊びでは、仲良く遊んでいるグループに近づいききなり水をかける瞬間のデジタルカメラの映像も残っている。しかし、本研究を進めていくにつれて、保育者が意識してI男の姿を5つの観点に照らし合わせて見るようになると、今まで目につかなかったI男の姿が自然と見えるようになってきたのである。例えば、何事においても好奇心旺盛。（『幼児の関心や興味』）遊び始めたら周りが言葉をかけてもわからないほど何にでも熱中する。（『熱中する姿』）できないことをそのままにせず、やり遂げたいと思っている。（『直面している困難に立ち向かう姿』）一人でいるよりも誰かと遊ぶことを好み、自分から積極的に誰にでも言葉をかける。自分の気持ちを素直に表現できる。（『自分の考えや気持ちを表現する姿』）友達をよく見ており、自分から言葉をかけたり、体に触れたりする。（『他児または他者の立場から物事を見ようとする姿』）等である。保育者が見方を変えただけでI男の今まで見えなかったものが見えたり、心の言葉が聞こえたりするようになってきたのである。保育者が子どものよさを意識的に見ようとし、子どもの傍らに寄り添おうと意識することでその後のI男の姿にも変容が見え始めた。友達にかかわるすべを知らず、叩いたり、押したりしてコミュニケーションをとろうとしていたI男が友達のことを思いやるまでに成長したのが次の事例である。

事例3 「だって、悲しそうにしてたから。」 11月11日

降園前の片付けの時に、友達とけんかをしていたA子。その後、タイヤに座り、うなだれている。

補助の保育者が言葉をかける。

T 「どうしたの？」

A子「・・・。」（黙ったまうなだれる。）

するとI男がやって来て、A子の側で同じような格好をして座る。その様子を見て、A子が笑い出す。そして二人で保育室に向かって走っていった。

その後、補助の保育者がI男に言葉をかけた。

T 「ねえ、I男君、さっきはどうしA子ちゃんの隣に座ったの？」

すると笑顔で、

I男「だって、A子ちゃんが悲しそうにしてたから・・・。」と答えた。

悲しそうなA子の様子を見て、何かあったのだと感じたのか言葉もかけず黙って側に寄り添うI男。その場の空気を読み、今のA子にどうしてやればよいのかと懸命に考えたであろうI男。その姿を見た瞬間、入園当初からのI男の様々な姿が脳裏をよぎったと同時にその成長に驚き、そして感動した。

I男の入園当初からのエピソード、遊んでいる姿や描いた絵や作った作品の写真を見た他の保育者からは次のような意見が出された。

- ・ I男が目立つ行動をしていたのはやはり不安だからであろう。
- ・ 認めてほしい、受け入れてほしいという気持ちをどう表現して良いかわからなかったI男。保育者に認められることで、自分も友達を認める事ができるようになったのではないか。（言葉で表す、相手を思いやる等）
- ・ I男の成長はまだまだ続く。行きつ戻りつする。それをまた保育者がゆったりとした気持ちで見守ることが大切である。

今後これらの意見を参考にしながら引き続きI男の成長を見守りたいと思う。



ICTを使った保育カンファレンス 井口教授・小西准教授を交えての事例検討

（2）H子の「学びの物語」

年中の時のH子への第一印象は、「少し変わった子どもだな。」というものだった。尋ねたことに対して全く意図が違うちぐはぐな答えしかかえってこない。むしろいきなり関係のないアニメの登場人物の台詞を発することもあり、会話が成立しなかった。しばらくの間、私はその様子を見守り、観察することとした。

年長になりH子を受けもつことになったが、遊びの様子を見てみると、遊びの中には入っているのだが、自分の独自の世界に浸って遊んでいるようで友達とのかかわりはあまり見られなかった。突然、関係のないことを言い出すことは相変わらずであった。他の子どもたちはそのことを「H子ちゃんは、何か変。」と感じているようだった。それが2学期になり運動会に向けてのかっこやリレー遊びを楽しんだことで様子が変わってきた。元々走ることが大好きなH子は、リレー遊びが始まったことで自信をもち「私も友達と一緒に走りたい。」と、リレー遊びを通して友達とかかわろうとする気持ちが芽生えてきているようだった。走るのが速いH子だったので、友達からも徐々に認められるようになり「H子ちゃ

ん、一緒にリレーをしよう。」と、誘われるまでになった。

しかし、友達に認められたからといってそれがH子にとって嬉しいというふうでもないように感じられた。ただ単に走ることが好きで、走ることの心地よさを感じている気持ちの方がまだ大きいように思われる。

友達との会話に妙な言い方が入ることもあるが、これまでのように突然違う話をすることは少なくなった。子どもたちのH子を見る様子も変わってきた。「何か変。」と思われてきたH子だったが、友達からその言葉も聞かれなくなった。これまでも保育者が「少し変わった子ども」と思いこんでいたが、自信をもって取り組むH子の笑顔が見たいと思い、H子に対する見方を変えただけで、今まで見えなかった姿が見えるようになってきたように思う。

少しこだわりのあるH子ではあるが、友達に刺激を受け、かかわる機会が増えるごとに成長しつつある。友達から「H子ちゃん、一緒に遊ぼう。」という言葉が増えていることを嬉しく思う。今後は、H子を温かく見守りながらH子の成長を楽しみたい。きっと「〇〇ちゃん、一緒に遊ぼう。」と誘い、言葉を自ら発する日も近いと思う。そのために心地よい経験を多く積ませていきたいと思う。



秋まつりの絵『友達と一緒にじゃおどりをしたよ』（真ん中がH子）

6 幼児教育の独自性の視点から幼小連携を考える

長崎大学教育学部 教授 井口 均

（１）はじめに—２つの問題提起—

2007年改正の学校教育法で幼稚園は学校種の最初に位置づけられた。しかも、「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うもの」（同学校教育法、22条）と記載された。これによって、大きく２つの問題が投げかけられたことになる。１つは、幼稚園でどのような力を育てることが「義務教育及びその後の教育の基礎を培う」ことになるのか、という問題である。もう１つは、幼小の連携のあり方をどのように考えるか、その基本的あり方についての問題である。

（２）義務教育及びその後の教育の基礎となる力とは

義務教育及びその後の教育の基礎となる、幼児教育による学びの内容は何か。幼小連携を考えた場合、この問題は避けて通れない。

その問題に言及する前に、小学校以降の学びについてふれておく必要がある。その基本形態は授業であり、「遊び」とは一線を画している。授業は時間が決められ、教科別の知識・技能が系統的に理解していけるように進められる。授業で子どもに示される問い（問題）とその正解がある。教師はその問いと正解を事前に知っており、問いと正解を子どもが自発的に探究するよう、またその探究過程をより面白くするため、発問、資料提示、討論などを工夫する。

その学びは、基本的に教師主導でありながら、子どもの探究心や意欲を引き出し、子どもが自発的に問いとその正解を見出す過程として演出される。それゆえ、教師は各教科の専門知識だけでなく、子どもにとって既知の知識や思考方略に関する把握も求められる。問いとその正解を発見するまでの子どもの思考過程を、事前に何パターンかシミュレーションできるという意味でも、授業は教師主導である。

義務教育及びその後の教育の基礎となる力とは何か。少々乱暴な展開だが、私見を述べれば、次のようになる。まず、基本的生活習慣の自立である。授業を中心とした日課の流れは細切れる的になり、生活面での自立性が求められる。知的好奇心と探究心を発揮し、考えたことや気づいたことを言語的に表現するコミュニケーション力も求められる。姿勢・動作を維持し、注意を特定の対象に向ける集中力と自制心も必要である。問いを共有し、問題解決へのすじみちを仲間と協同・協働して見出す力などこそが、基礎となる力である。これらが、小学校以降の教室における授業を中心とした学習活動や生活を支える、と考える。

（３）幼小の連携・接続のあり方

義務教育及びその後の教育の基礎となる力を、幼児教育では授業と異なる「遊び」を中心とした園生活全体を通して学ぶ。この点が、幼児教育の独自性であり、幼小連携及び接続のあり方考える際の基本となる。

幼稚園や保育園で小学校における授業で必要となる準備的教育や先取り的教育をすることが、幼小の連携及び円滑な接続を達成する本質的な解決策ではない。準備的教育や先取り的教育は、例えば椅子に座って先生の話が聞けるとか、文字の読み書きができて自分の名前が書けるとかなどを問題にすることが多い。その根底にあるのは、小学校以降の教育で必要となる学習態度（姿勢）や学習しなければならない各教科の具体的知識・技能を前倒し的に訓練し、早めに「できる」ようにしておけば、円滑な接続が可能となるという考え方である。全面否定はしないが、準備的教育や先取り的教育が過度なまでにエスカレートし、早めに「できる」こと自体が価値のあるかのように、一人歩きしてしまうことの方がむしろ問題である。

それと密接不可分な関係にあるのが授業評価である。教科中心の授業での学びは、子どもの学びの成果を点数化する一面をもつ。観点別評価により、点数化は知識・技能だけではないという見方もできるが、主には知識・技能の量、つまり客観的評価として測定できる力が先取りされることになる。それは幼児教育の独

自性を見失うことを意味し、幼児期を単に準備段階として正当化しようとしているに過ぎない。

より本質的な解決策は、むしろ小学校以降の教育での授業のあり方を見直すべきである。授業の中で、子どもの問題解決への必要性を引き出し、教師と子どもたちの協同・協働による問題解決が展開されることである。要は、幼児教育における小学校の授業の先取りでも、小学校での授業の遊び化でもない。遊びにおける学び方を小学校以降の教育で継承することこそが、幼小で連携されるべき内容ではなかろうか。義務教育及びその後の教育の基礎となる力は、遊びを中心に、生活の中で獲得される。その過程は、自分なりの意味づけや仲間同士での「折り合い」あるいは「教え合い」という関係性を基本に展開する。予め明確な正解があるわけでもない。

(4) 最後に

—「遊び」と生活での学びのストーリーを読み解く取組みへの期待—

保育を参観した小学校以降の学校教師が一言に言うことは、「園では、子どもがそれぞれ好きな遊びをしているだけではないか」である。それに対し、保育者は「遊びの中で、子どもは様々なことを学んでいる」と、具体的に「できる」ようになった行動現象を挙げ連ねてでしか言い返せない現実もある。

義務教育及びその後の教育の基礎となる力の獲得を具体的に説明でき、幼児教育の独自性に沿った子どもの評価・理解と援助・指導のあり方を検討していかなければならない。その方法は、小学校以降の教育で一般的な、目に見えるかたちでの、客観的な「できる・できない」を基準にした評価と異なって当然である。

子どもの育ちは、様々な活動体験が織り込まれ、モノや他者とのかかわりを通して形づくられ、その子なりの意味づけを伴った個別的で内面的な学びのストーリーとして具現化される。その学びを把握するには、まず、子どもを自分から「～しようとする」存在として捉え、その子の個々の行動の意味づけと問題解決過程を多面的見方によって読み解くことが必要となる。そのことは結果として、子どもを肯定的に捉えることでもある。意欲的な実践研究として、1年目の成果に満足している。

7 今後の取組について

長崎大学教育学部附属幼稚園 園長 元田 美智子

本研究を教育学部副学部長 井口 均先生、准教授 小西 祐馬 先生、スーパーアドバイザーの福島大学教授 大宮 勇雄先生と附属幼稚園の教員が共同で研究に着手し、よりよい保育改善へと向かうことへの充実感を皆で味わっている。そこで、今後（平成24年度）以降、研究をより具現化した取組にするため、以下のような視点での検討を考えている。

(1) 保育者の更なる意識変革

本研究に着手するまでは、カリキュラムの存在がいつの間にか大きくなりつつ

あった。この期は「この遊び。この行事も待っているよ。」など。いつも何かに追われているような状態もあり、子どもの好奇心や探求心がどこから沸いてきたものかなど、子どもの心（内面世界）に近づくことを忘れがちになりつつあった。

研究を始めて1年に満たない実践であるが幼児の遊びに向かう姿を追う保育者の眼差しがより温かくなりつつある。子ども一人一人の気持ちに寄り添い遊びを見守ろうと努めていることが伝わってくる。時には幼児と遊びを共にする中で保育者自身も楽しんでいる。遊びを楽しみながら子どもを「観察」する保育者も現れだした。今後も幼児が遊びに入ったり浸ったりする姿を十分に認め、幼児一人一人の内面理解に更に努めたい。

（２）ＩＣＴなどの教育機器を活用しての観察記録の分析の蓄積

子どもの遊びを観察記録する際ＩＣＴなどを活用することで子どもの目線や目の輝き、つぶやき（小さい音など）、子どもの体の動き、遊んでいる子どもの周囲の状況などが、より詳しく把握できるようになった。

また、動画を静止画像にしてみたり、音（言葉、楽器、風…）について注意を払ったりと子どもの遊びについての分析も多様になりつつある。複数の目で分析を重ねていくことで、分析をより客観性を帯びたものへと考えている。

（３）保護者との連携

子育てに対する保護者の不安は大きい。地域とのかかわりが希薄になりつつある社会で子育てをしている母親、特に専業主婦にとって子育ての支援はより必要感を増している。保育者は、園生活を通して把握した「子どものよさ」をできるだけ多く伝えるよう心がけている。その子ども一人一人のよさを伝えることで、母親の子育てへの自信へと繋げている。

また、次年度は保護者の子育てを「結果志向」から「学び志向」へと意識を変えていきたい。「学び志向」とは「子どもは有能な学び手であること。」「困難なことなどに立ち向かっていくような学習意欲に溢れた子どもに育てること。」これらのことについて具体的な事例を通した語りの場の設定を育友会とともに図りたい。

（４）教育実習に活かす

子ども一人一人の「よさの把握」は、幼児教育の主課題そのものである。子どもも理解（観察記録）に基づいた指導案作成、保育実践を今まで以上に進め、学生の専門性を高めたい。

次年度は研究2年目となるが、あせらず「子どもの心」に近づくような実践を蓄積し、遊びの分析、よりよい保育への改善を目指している。

（参考文献）

福島大学附属幼稚園

大宮勇雄・白石昌子・原野明子『子どもの心が見えてきた』ひとなる書房 2011